

「熊本 S. J. C. D. 例会抄録」

演題 「混合歯列期の床矯正の有効性と限界について」

演者名 鮫田誠也

日付 2014年8月26日(火)

KeyWords

1. 咬合誘導
2. 床矯正装置

抄録

毎日の臨床で、歯列不正で来院される小児を見ない時はないくらい、何らかの問題を抱えている小児患者が多いのは周知の事実である。そのまま経過を見ることで、将来、便宜抜歯や、複雑なブラケット矯正、外科矯正といった治療を選択せざるを得なくなることもある。

乳歯列期からから矯正専門医を受診する患者は少ない為、それを回避するためには身近なかかりつけ医での早期対応が必要となる。

今回の発表は、治療開始が8歳1カ月「HellmanのDental Age III A」、上下顎前歯部萌出スペースが不足していた女兒で、①床矯正装置により顎骨の拡大、②筋機能訓練も行いながら、現在は12歳11か月、右上E以外は永久歯列に移行してきている。咬合関係をみると、今後ブラケット矯正が必要になると考えられるが、成長途中の患者であるため、ブラケット矯正をいつ開始するべきか、又、このケースにおいて、成人になってからブラケット矯正を始めるべきであったのか、諸先生方の御意見、御指導をお伺いしたいと思います。宜しくお願いします。